

読書感想文部門

総評

応募作品数は飛躍的にのびましたが、依然として荒筋の紹介に終始した作品が多く、今後課題を残した審査会となりました。

その中で入賞作品は、「本」と「私」とがしっかりととらえられ、「本」に対する充分な読み込みと「私」への確信がなされています。

入賞者一覧

○優秀賞

「お父さんのかさはこのこです」

岐阜県美濃加茂市立山手小学校 一年

山村 仁美

「ヘレン・ケラー」を読んで

愛知県愛知郡日進町立東小学校 二年

山村 仁美

「花さき山」を読んで

岐阜県岐阜市立網代小学校 三年

山村 仁美

「優しさと強さ」

佐賀県伊万里市立山代中学校 二年

山村 仁美

○優良賞

「よだかの星」を読んで

山梨県甲府市立穴切小学校 三年

山村 仁美

「悲劇の少女アンネ」

東京都大田区立調布大塚小学校 六年

山村 仁美

す。皆さんが感想文を書く上で、大いに参考にしてください。

「本」と皆さんとの出会いがまだまだ少ないということ、今回の審査を通して痛切に感じました。まず、「これが私の本です」と言える本を一冊見つけること。これを次回への課題としておきます。

「神さま わたし

マーガレットです」を読んで

岩手県岩手郡西根町立平笠小学校 六年

高橋 恵子

「つむじ風のマリア」を読んで

岩手県岩手郡西根町立平笠小学校 六年

高橋 恵子

「二十四の瞳」を読んで

愛知県豊田市立高岡中学校 一年

諏訪 裕喜江

○佳作

三浦 公美子（宮城・一年） 藤沢 博子

（岐阜・二年） 森口 たくや（富山・三年） 局 葉子（大分・六年） 杉村 たか

子（熊本・六年） 黒柳 保則（愛知・中学一年） 加藤 高広（愛知・中学一年）

外山 悦子（茨城・中学一年） 白水 理子（愛知・中学一年） 北園 祐美（神奈

川・中学二年）

優秀賞受賞作品

お父さんのかさはこのこです

山村 仁美

岐阜県美濃加茂市立山手小学校 一年

指導者 奥田 順子

この本をよみおわって、わたしは、かがみのまえに、はしっていききました。

わたしのかがみ、なにのどうぶつにみえるのか、しりたかったからです。かがみのまえで、あかんべーをしたり、口をとがらせてみましたが、なんのどうぶつか、きまりませんでした。そのうちに、ひとりてわらってしまいました。また、本をみなおしました。

わたるさん、あめがふるのに、お父さんのおむかえ、たいへんだったね。三ぼんのかさが、わたるくんのかさ一本になっちゃって。

わたしなんか、ひとりでお父さんをむかえにいったことなんかないので、わたるくんはとてつよいとおもいました。

かみなりがなったり、おかみのようなおにいちやん、サルやら、ライオンやら、オットセイやら、フクロウやら、キツネやら、いろいろなどうぶつにおじさんたちがみえるなんて、おもしろくて、おもしろくて。それに、やねからおちる水のながれが、どうぶつえんのおりになっちゃって、よみながらどうぶつえんをおもいだしました。

わたしが、きれいなふくをきて、わたるさんのところに行ったら、くじやくになれるかな、とかがええました。

どうぶつをのせたバスが、あせびつしより
であめの中をはしって、のぼってきたんだね。
わたしたちも、がっこうがえりにあめにふ
られて、あせびつしよりで、うちにかえった
ことがあるので、よくわかりました。

つきからつきへ、かわったどうぶつがおり
てきましたね。オオカミのおにいさん、こわ
かったでしょう。

みんながかえりだして、お父さんはこない
し、かわいいウサギの子もなきだし、わたる
くんも、なきたくなつたでしょう。

そのとき、お父さんにきてもらえてよかつ
たね。

わたしも、お父さんがきてくれたので、う
れしくなりました。ながいこと、まったんだ
もんね。お父さんがきて、うれしいことと、
びつくりしたこと、なみだがでたんだね。

そして、すぐ、ウサギのパパも、かきはも
つていなくなつたけど、かえつてきてくれたの
で、ウサギの子もわたるくんとおなじように
うれしかったんだね。

二がつきからは、おなじ一ねんせいなんだ
ったね。わたしもともだちになりたいとおも
いました。

そして、わたるくんのお父さん、とてもし
んせつで、ちからもちで、すばらしいね。

かさをなくしたウサギのパパに、また、じ
ぶんのかさをかしてあげたり、もたらろうの
ようにちからもちなんだね。

「はい。お父さんのかさは、このことです。」
といって、わたるくんをかたぐるまにのせて
くれるなんて、ほんとに、こころのやさしい

「あかねさんも、時には目をつむつたり、で
ん気をけてひいてごらん」
といわれました。

さつそくやってみたら、目をあけてひくの
とずい分ちがつていました。「ガボット」や
「メヌエツト」をひいてみたら、たのしいこ
とがうかんできました。

そうだ、このように目をしていてるという
ことは、こわいと思つていたけれど、
むちゅうでなにかをやればくるしきにもか
てるのだ。だからヘレンさんは、つらい「三
じゅうく」にもたえて、がんばつていろんなこ
とをべんきょうされたんですね。

ヘレンさんが大学生のころ考えた、「目の
見える人が、ほんとうにものを見ているだろ
うか。耳の聞こえる人が、ほんとうにものを
聞いているだろうか。ほんとうに見たり、聞
いたりするのは、心のはたらきがなければで
きないのだ。」ということばがあります。なん
だかとてもまいじなことをいつているよう
な気がします。いつかわたしは、もつとこの
ことばがよくわかる人になりたいと思います。

選評

本から読みとつた感動を、自分で体験
しようと実際に試みています。ヘレンの
体験を自分の体験に重ねて、ヘレンの感
動を自分の感動として作品にうまく表現
できました。文章も、とてもしつかりと
書けています。

ちからもちだ。

わたるくんが、お父さんのかたぐるまにの
つたとき、みんなからのほくしゅ、かつこよ
かつたね。

わたしは、わたるくんもお父さんも、つよ
くてやさしい、しんせつなおやこだなおと
おいました。

わたしも、お父さんのかたぐるままで、か
きをさしてみたくになりました。

選評

山村さんは、わたるくんと同じ場所に
いるような気持ちになつていて、わたる
くんの気持ちをとてもよくとらえていま
す。山村さんの気持ちを追っていくと、
このお話がどんなお話であるか、手にど
るようにわかります。全体の構成もしつ
かりしています。

優秀賞受賞作品

「ヘレン・ケラー」を読んで

綴綴 あかね

愛知県愛知郡日進町立東小学校 二年

指導者 伊藤 寿代

ヘレン・ケラーのおばさん、わたしはあな
たの日記をよんで大へんおどろきました。
おばさんは、赤ちゃんの時にびょう気になつ
て、目が見えなくなり、耳も聞こえず、口も
きけなくなつて、とてもお気のどくでした。
わたしはだたらがまんができません。
ために、一ど五分間ぐらいじつと目をつ

優秀賞受賞作品

「花さき山」を読んで

早川 恵子

岐阜県岐阜市立綱代小学校 三年

指導者 船戸 貞子

山おくのひっそりして人つ子一人いない原
っぱに、見たこともないようなきれいな花が、
一面にさいている。赤い花もある。つゆをの
せてさきかけている小さい青い花もある。そ
の花は、村人がやさしいことをすると、さく
わたしは、ふつうの花は、たねをまいたり、
球根を植えたりするとさくけれど、この花さ
き山の花は、球根もたねもなんにもないのに
さくのでふしぎだなあと思いました。
でも、本当に球根やたねがあつたら、どう
でしょう。球根やたねがあつたら、やさしい
ことをしてもしなくてもさきます。だから、
神様が、だれかがいいことをすると、見えな
いたねをまいて花をさかせていると思いまし
た。

そんな話をお母さんにすると、

「人に気づかれないところで、ごみをすすん
で拾ったり、きょうだい仲よく助け合つたり
して、いいことをしている子がきつとたくさ
んいるので、それを神様が見つけて、花をさ
かせてくださるのかもしれないね。花さき山
の花は、何よりもきれいな心の花やと思うよ。」
「そんな花をたくさんさかせたいね。」
「うん。そうすると、楽しくて、気持ちのよ
い毎日が送れるね。」

むつてみたのですが、すぐに目をあけてしま
いました。

ヘレンさんは、なくなるまでの八十八年間
ずっと、くらいせかいの中でいっしょうけん
めいべんきょうされました。それにおとなに
なつてから、目がふじゅうで気のどくな人た
ちのためにしごとをみつめてあげたり、よみ
やすいてん字の本を作つたりして、りっぱな
しごとをされました。

わたしは、もう一度目をつむつてみました。
この間見たばかりの、赤や青や金色のきれ
いな花火がパツパツとふかんできました。また、バ
イオリンのはつびょう会の時、お友だちから
もらったきれいな花たばがうかんできました。

ヘレンさんは、形とか、色のある思い出が
ないかもしれません。けれど、手でもものにさ
わつたり、てん字という小さなぶつぶつのあ
つまった文字をゆびでさわつて、詩やどうわ
やいろいろなお話をよみ、鳥や魚や花、また、
人間のことなどをしていかれたのですね。

本には、ヘレンおばさんのしゃしんがのつ
ていました。びつくりしたのは、バイオリン
ストのがつきの先のねじめのあたりに、ヘ
レンさんがゆびでふれて、音がくを聞してい
るしゃしんです。

どうして、ふつうの人はゆびで聞くことな
どしないのに、目が見えない人は聞けるのか
なあど、ふしぎに思いました。このわけを、わ
たしのバイオリンの先生に聞いてみたら、目や
耳のふじゅうな人は、音のひびきをゆび先をど
おして、心や体で聞けるのだそうです。すご
くしゅうちゅう力がはたらくのだそうですね。

という話し合いになりました。

わたしたちの学級では、いいことをした子
を見つけると、じょうほうばこに、だれだれ
さんがこんなことをしてくれました。ほめて
あげましょうと書いて入れます。一日に、さ
い高十まいもいことが入っていることがあ
ります。トイレのスリッパをきちんとならべ
てくれた子のことや、雨の日、かさのしつか
りたんだないのを、きちんとたんでくれ
た子のこと、そうじをいっしょうけんめいや
つた子のこと、給食当番でなくとも、しよつ
きやおぼんなどをすすんで運んでくれた子の
ことなどたくさんあります。この子たちは、
人に言われてやつたり、ほめられるためにや
つていてるのでは、ありません。美しい心が、
そういう行いをさせているのだと思います。
そんな子のことが、花さき山の花となつてさ
いているのではないかと思います。

わたしは、ころんだけがをした子をほけん
室へ連れて行つたり、ひとりぼっちの子をさ
そつて、遊んであげたりしたことがあります
が、花さき山に花がさいているか心ばい
わたしは、あじろ小では、五年生の子が
中心になつて、花を、大切に育てています。

花の世話をしながら、やさしい心を育ててほ
しいというねがいがこめられています。暑い
日の水やり、草引きは、なかなか大へんです。
今年の夏は、特に、暑い日が多く、雨が少な
かつたので、一日も水やりをかかせません
でした。朝と夕方、水をやりに来ている子や、
汗を流して草引きをしている子を見ると、す
ごいな、がんばっているなと思いました。み

優秀賞受賞作品

優しさと強さと

井手 由美子

佐賀県伊万里市立山代中学校 二年

指導者 音西 由美子

んなのどりのくのおかげで、今、花だんには、美しく花がさいています。「いっしょうけんめい世話をしてくれてありがとう。この花は、あなたたちのがんばりの心がさせた花だよ。」と言っているようです。もちろん、たねをまいて育てた花だけれど、その花を見ていると、いやなことがあったときでも、気分がよくなるからふしぎです。

やさしいことをすれば、花がさく。

いのちをかけてすれば、山が生まれる。

自分のことより人のことを思って、なみだをいっばいためてしんぼうすると、そのやさしさと、けなげさが、花になってさきだす。山んばの声が、言葉が、ひびいてくるようです。

なんてすてきなことでしょう。わたしは、あやのように、ほしい物を妹にゆずってがまんすることは、なかなかできません。妹が何か買ってもらえば、同じようにほしいのです。でも、これからは、少しでもやさしいことやしんぼうをして、きれいな花をさせたいと思います。そして、たとえ苦しいことやかなしいことがあっても、たえられる人になりたいと思います。

選評

「花さき山」を読んで得た感動を、母親との会話、学校での活動を通して、さらに一步深めています。感動が体験を通して、早川さん自身の「思い」や「願い」となっていく過程が、しっかりとした文章で描かれています。

人が人の上にたち、人を支配する。そして力の弱い者は、力のある者に差別を受けた。その人々に「自由」というものは、あったであろうか。「平等」というものの輝きを求めることはできたであろうか。

ナチスという侵略的な独裁党はジブシー・ユダヤ人を劣等民族だと考え、少しでもその民族の血の混ざっている者は、死の淵へと追いやった。その死の淵というのがアウシュビッツである。一日に何百人という人々がナチスという組織に捕らえられ、殺されていった。それは、ナチスの将校、親衛隊の気持ち一つで決まってしまうものであった。今日死ぬか、明日死ぬかという、生と死が紙一重となったまさに、この世の生き地獄であったアウシュビッツ。

人は、自分が死ぬ直前に達した時、優しさと思いやりというものを忘れ去ってしまう。すぐ隣で母親が死んでも、表情一つ変えないといった人間の変わり方には驚く。そこまで苦しみは、人間を変えてしまうものなのか。しかし、ここに最後まで人のために尽くし神を信じて死んでいった一人の人間がいた。マキシミリアン・コルベ神父、その人である。どんな重労働にも耐え、ひたすら神を信じた

ない。人が、本当の人間というものを見失ってしまう。これが、人の世で一番悲しいことだと思う。

人間が、ひとたび戦争の中で一つの目的を掲げたとき、人間はケモノ以下の存在になり下がるという事実。コルベ神父の深い、清らかな「愛」。

死か殺人を選ばなければいけない極致に立たされた時、私はどちらを選ぶだろうか。そんな世が、もう二度とこないようにするのが、私たちに与えられた使命なのだ。

選評

コルベ神父との出会いによって得たいろいろな感動を、自らの中で自らに問いかけ、井手さんなりの「答」となる言葉を見つけようという作業をしています。

選出した言葉が、井手さん自身のものとなっていて、難しい作品にもかかわらず、最後までしっかりと書かれています。

人だった。深い深い「愛」を持ったコルベ神父は、私に神の世界を教えてくれた。コルベ神父は、ナチスの憲兵の「君は、ドイツ系ではないのか。資料によると確かに……」

という言葉に

「私は、ポーランド人です。私は祖国を愛しています。」

とはつきりと答えた。その時、コルベ神父の答えようによつては、アウシュビッツへの道をまぬがれることができたかも知れない。コルベ神父が立たされた立場で「私は祖国を愛しています。」と言うことは、並大抵のことではなかったはずだ。それは、死につながるこ

とが分かっていたから……。世界で初めての核兵器による犠牲者を出した「広島」「長崎」の両市の死者数を合わせて約三十万人。アウシュビッツで、銃殺、餓死、室息、毒ガスなど様々な殺りく方法で殺された人々の数、およそ四〇〇万人。武器を手に入れない人達を、一方的に殺していくといった残酷さに、私はナチスという組織が本当に人間から結成されているのかと疑問にさえ思っ

た。「人生には、一つの義務しかない。それは愛すること。学ぶこと。人生には、一つの幸福しかない。それは、愛することができること。」人を人と思わないナチスに、この言葉がどれ程憎く聞こえたか。死の淵へと追いつめられた人々の中に、愛を持った人がいたとすれば、恐ろしいことではなかったろうか。生と死が背中合わせとなった極致で、「愛」が

子どもの文化・教育研究所事務局報告

先回の四倍近い応募作品が寄せられた第二回全国小・中学生作品コンクールですが、この作品集の刊行をもちまして、結果報告とさせていただきます。

今、当事務局の保管庫には、五千点を超える子どもたちの作品が眠っています。この作品集には、ほんのひと握りの作品しか載せることができませんでしたが、ここに在る作品たちは、どれをとっても、子どもらしいキラキラと輝く「宝物」であることにまちがいはありません。

今回のコンクールに、これほどの「宝物」が寄せられたのは、全国の子どもたちの情熱と努力の賜物であるとともに、学校の先生方、そして御両親といった大人たちの御理解があればこそであると思っています。

子どもの文化・教育研究所が課題とする「子どもの文化・教育のためのより良い環境づくり」は今回のコンクールをもつて、さらに一歩前進できたことを確信しています。

そして、お忙しい時間をさいて審査を担当して下さった先生方、事務局一同心から感謝申し上げます。

来年度には、子どもたちの「宝物」がさらに二倍にも三倍にも増えることを祈りつつ、皆さまの積極的な御参加を願って止みません。

存在する余地はなかっただろうから。

ある日、コルベ神父のブロックから逃亡者がでて、見せしめとして十人が無差別に餓死刑として選ばれた。一人のポーランド軍曹が妻子の事を思つて号泣したのを見て、コルベ神父は、自ら死への近道を選んだ。そう、コルベ神父は、ポーランド軍曹の身代わりをかつて出たのだ。生命は、一つしかない。一生というものは一度限りなのだ。聖書の一節に「人が、その友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」とあるが、今の時代の人間は、友のため命を捨てることができるだろうか。友のためとはいえ一生をふいにすることは出来ない。これがごく一般人の考え方ではないか。私も、その中の一人である。けれど、何故コルベ神父には他人の代わりに死ぬことができたのだろう。深い愛と心の強さ、これだ。人は優しさだけではいけなかったのだ。どんなことが起こっても心を支える柱が必要だったのだ。これが強さの源になるのではないだろうか。コルベ神父の心の中にあつた柱は、マリア、神だったのだと思う。

餓死室から聞こえる讃美歌が、見せしめに選ばれた受刑者の心を支え、なぐさめていた。急ぎ足でやって来ている死をせめて穏やかに迎えてほしいと。コルベ神父は、最後まで祈り続けた。そして、毒薬入りの注射器を自分から腕を出して受け、天に召された。

流れゆく歴史の中で、これほどまでに人間の命というものが、生命の価値が軽くなった時はあっただろうか。人が人を人間として見